

# 1 と畜場搬入豚から分離された *Streptococcus suis*

○<sup>マツモト</sup>松本 <sup>ケイ</sup>圭 (豊橋市食肉衛生検査所)  
陣内 俊 ( " )  
吉川 雅己 ( " )  
瀬尾 幸嗣 ( " )  
細井 美博 ( " )  
斎藤富士雄 ( " )

## 1. はじめに

豚の疣贅性心内膜炎の主要な起因菌である *Streptococcus suis* は、ヒトにも感染し、髄膜炎、敗血症、多発性関節炎などを引き起こすことが知られている。昨年、ヒトの豚レンサ球菌感染症の発生を受け、厚生労働省からと畜業者等に対し注意喚起されたところである。今回、豚の疣贅性心内膜炎から分離された *S.suis* について調査したので概要を報告する。

## 2. 材料および方法

2002年9月から2005年6月に搬入された豚で、疣贅性心内膜炎を認めた282頭の心内膜疣贅物(疣贅物)を定法によりスタンプ培養後、起因菌を分離・同定した。さらに同一農場で3頭以上から *S.suis* が検出された6農場の計54株については、Kirby-Bauer法により、13薬剤についての感受性試験を行なった。

## 3. 結果および考察

と畜豚453,105頭中282頭(0.06%)に疣贅物を認め、起因菌を分離した235頭240菌株中、*S.suis* は67.5% (*S.suis* I:36.25%、*S.suis* II:31.25%)を占めた。*S.suis* が10菌株以上分離された施設が3農場あり、同菌による疣贅性心内膜炎は特定農場に続発する傾向がみられた。薬剤感受性試験では、6農場のうち、1農場の菌株は13薬剤すべてに対し感受性を示した。4農場はすべての菌株がリンコマイシン及びテトラサイクリンに対し耐性を示し、1農場は1菌株を除きリンコマイシン及びテトラサイクリンに対し耐性を示した。菌株間での薬剤感受性の違いについては、聞き取り調査の結果、本試験で用いた13薬剤を含有しない飼料を給餌していたことから、農場で治療等に用いた薬剤による耐性獲得の可能性があり、薬剤の使用には慎重を期する必要があると考えられた。*S.suis* は人獣共通感染症として重要であり、今後は本調査の結果を、と畜業者等を含む養豚に関係する従事者に対する指導・啓発に生かしたい。